

本文ヲシ付

浪花節大會



特  
4



特30

486

浪花節

浪花節大會

なら磨口演

西郷隆盛船中の盟

フン入相告ぐる鐘の聲……聞くは……鹿兒島磯の濱……月も……  
 を心を汐の……浪を狂ふ薄煙……中に……ほんのり櫻島……眺め盡させぬ  
 景色なり

詞古今無双の英雄、西郷隆盛は此の夕暮の眺めに見惚れて、磯邊へ立ち止りながら

明治  
 45(1) 5. 23  
 内交

隆「ハ、ア江上の清風、山間の明月さて〜心地よき景色であると云ひながら此方を振り向きますると、後に立て居る、篠原國幹が國「ヤア各々方、彼の赤壁の遊びに、ならひて此の景色を眺めながら船に一夜を明さうではござらぬかと、笑ひながら申しますと」之も西の後ろに歩いて居つた桐野利秋が

利「ウム、豫て約せる如く、世間と憚かる今夜の評議適か離れし櫻島の沖へ漕ぎ出して話し合ふのも、水魚のちなみ、如何にも〜」

フシ「ゆる〜評議致さんと……衆て用意の……酒肴……三人は……各々手に提げて……千鳥足許……漬つたひ……浪打ち際へ辿りつき、船の纜解きすて、……十丁ばかり漕ぎ出ぬ……」

詞「船が適かの沖へ出てしまひますと、船の中なる桐野利秋は西郷隆盛に向ひまして云ひまするには

利「此の度び私學校生徒の暴動に就て、貴殿は定めて苦々しく、思召されるであらふが、さりながら、關東方の振る舞ひ捨て置き難い一事が御座るが貴殿は未だに、御存じなさか」

と言葉巧みに問ひかけました  
すると隆盛は居直りて膝を進めながら

隆「フ、ム其の仔細は如何なる事で御座る

利「ハイ、其の仔細で御座るか、……イヤナニ……篠原氏、貴殿よりして彼の次第を

浪 花 節

フシ「委細……つぶさに……御話下されよ……譲る……利秋……次ぐや言葉……篠原が」

詞「篠原國幹は……容を改めて隆盛に打ち向ひ、

國「されば去る頃關東より、免職となりし歸り來して數名の警部、何處となく、いぶかしき様子のあるので早速、取り捕へて厳しく詮議を遂げし所、……貴殿を始め、我々を、暗殺せよとの内意を受け、表面上、免職となりて、歸省のつもりだと、自狀致した故に、其の口供に……拇印を致させ、入獄せしめて貴殿の御歸宅を待ち受けましてござる」と

フシ「聞くより隆盛憤然と怒れる顔に……朱注ぎ、髻揉あげて、聲あら

浪 花 節

詞「ヤア、卑怯なり卑劣なり、奸佞無智なる上に國家を誤まる奴輩め、

いで此の上は最早猶豫はならぬぞ、

直ぐ様兵を引き卒れて上京し此の次第を尋問致すべし、各々方も御用意致されよ

フシ「丈夫の……決斷……満面に……勇みの色を……現はせば……側に

控へし篠原は、ハタと横手を打ちながら……斯は天晴れの御奮發……是れに……優れる手段なし、さは去りながら……去りながら茲に一つの難儀あり……」

詞「其の難儀と申すのは、他で御座らぬが先づ關東へ向ふには肥後の熊本を通つて行くが順路では非通らなければなりません」

然るに兵卒を引き連れて行たならば、熊本縣令か或は鎮台司令長官は、我々の通行を、さへざる事必定で御座るが其の場合に臨んだならば、如何致して宜からふやと、眉を蹙て殊更に心配の様子を示すのも、心には確然と巧みがあるので御座へます  
すると桐野利秋も言葉を勵まして

利「これはしたり篠原氏、何のこれしきの事を御心配なさるに及びましようぞ、苟しくも西郷殿は陸軍の大將、其の大將が兵を引き率れて通行致すに何の、とがむる道理や御座らうぞ

若し又た、とがむる者があつたならば能く〜條理を説いて相ひ諭しませうよ、シテ又た聞き入れざる其の時はハテ是非に及びませぬ、……絶

體絶命、打ち破つて通るまでのこと」ハ、西郷殿如何で御座る  
隆盛は聞いてニコと笑ひまして

隆「ハハ、今に、はじめぬ事ながら、桐野氏の御憤發、濶よき事御座る、のう篠原氏

云はれて篠原國幹も心地よげに笑ひながら、  
國「左様々、然らば此の議に決すべし」と

フシ「評議整ふ船の中……其の有様は唐土の……誓ひ名高き三國誌げにも……斯くぞと知られける

隆盛戦死の場

フシ「曉の……雲に……ひらめく日の丸の……旗押立て城山へ、雲霞の如く集りて……峻き嶺より打ち下す……鐵砲玉は……雨霰れ……岩崎谷の賊軍も……今は防がん術もなく……各々顔を見合せて……只茫然たる計りなり

詞「此の時、有田賢助は、獨り陣中を抜け出まして、徒士の儘鐵砲引提げて山を下り、岩崎谷の林間に暫しイみながらの獨り言

賢「思ひ廻せば、我が父上は、吾れに手柄を取らせ度さに忠義を忘れ、隆盛の在所を吾に言ひ明し、それを悔んでの御切腹、其御心根の辱けなき、譬へ恩ある隆盛なればとて

人手に掛けては、亡き父の折角の志を無にする道理、之れを立んとす

れば、立ぬは恩を仇に報する諺

「ゆるして給はれ隆盛殿」と兩手を合せて伏し拜み鬼になつてと、紅葉の蔭にまつとは、知らぬ西郷隆盛は諸士の、進めに是非もなく、駕にゆられて來かゝりますると、今は是れまでなりと、有田賢助は、狙を定めて堂と打ち出しましたが、響と共に誤たす、駕の内なる隆盛の、腹より腰を貫きました

ダガ剛氣の隆盛であるから、すかさず用意の小銃を手早く取つて打ち返す……彈は狙はずれず賢助の眉見を、ズドンと打ち貫きましたから堪りません其の虚空を擲んで死んで仕舞ましたが、實に因果應報は怖ろしいものであります

フシ「斯る所へ駆け来る……別府新助此の體にハツト驚き隆盛の……傷  
へ立ちより介抱す……流石剛氣の隆盛も……急所の……痛手に顔色變り……  
……苦しき息をホツト吐き

詞「チエ、口惜い……大事を起した其日より今日までの艱難辛苦、敗北  
したならば討死とまで兼て覺悟の身ではあるが、花々敷、勝負も遂げず  
空しく此所で果るとは残念……今こそ思ひ當るが

今年の春、桐野、篠原、諸共に櫻島の沖へ船出して酔て船中に眠りし時  
我が亡き友の月照が、夢に現はれて、嚴敷き諫言……失れを聞き入れざ  
りしは我が身一生の誤り

今更悔むも是非ない事であるが、此の度の戦ひに生命を捨し數千人の人

を

フシ「不愼の者やと計りにて……己が手疵も……苦となさず……腸を斷  
つ……仁者の涙……

詞「別府新助は……詞を勵まして、

新「ヤア……御歡きあるな西郷殿、早く壘中へ往て御養生、いざ、させ  
給へと」すゝめましたが

フシ「隆盛じろりと打ち見やり……否々最ふ逆も……助からの身の……

急所の深玉……御名残惜や別府氏……斯ふして長き苦痛をせんよりも……

憚かりながら御介措……頼むと云ふも斷末魔……ハツト答へて新助は立ち  
上りしが今更に……情けなや……無慘やと涙浮へてイめる……折から聞ゆ

る喇叭の音、臨終の隆盛聲あらく

詞「アレ〜敵は早や問近に來りじぞ、サア時を移して我が首を、敵へ渡すは味方の耻辱であるから一刻も早く切り放して此の首を向ふの溝へ埋めて給はれよ

フシ「急き立られて新助は、……最ふ是れ迄と立ち上り、御覺悟あれと振り上る……劍の光り隆盛の首は前にぞ落てける……桐野、村田を始とし……宗徒の人々諸共に煙と消えて大丈夫の……心のうちこそ勇ましや

壇の浦 平家の没落

フシ「頃は壽永の末なりき……身に沁む風の吹き初めて、草末の露は最

と重く……白萩風になびく夜を……月に啼くなる雁の聲、世は何處となく淋しげに……物の哀れを告る頃、茲に平家は公達は……旅寝の床の……草枕……露も涙を争ひて、只物のみぞ悲しまれ、何時か戻らんのもなく、爰に入道清盛が作り置きたる福原の……都の様を見給ふに  
春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、雪見の御所や萱の御所鴛鴦の瓦に石疊……人の館は悉く三年が程に荒れ果て道を塞げる苔の色

詞「盛り盛りし平家の金殿玉樓も今は見る影もなく、閉たる門の内や外には蜘蛛の網、彼方此方に張られて家根の瓦には草が生ひ茂り、館の垣には蔦かづら思へば昨日迄、奢り榮えて浮世を夢に送り來れる此の福原の宮殿へ火をかけたまして



畏れ多くも、時の主上安徳天皇様を奉じ参らせて御船に打ち乗り波路を漕ぎ分けて西海さして落ち行きましたたが適かに、都の方を眺むれば、盡ぬ名残は惜しまれて、海士の焼く藻の夕煙り、袖に宿かる月の影、見るもの聞くもの總て哀れを誘ふ基にて心痛めぬ物はなく、惚ぶも今は涙の種なる平家の公達、盛り極めし昨日までは華の如くに美しく樹並べし十萬騎の人々も今日は散り／＼に西の海、浪に漂ふ身となりましては、眞に忠義を思ふ人々の數は僅かに七千餘人となりましては、

フシ「水の流れと人の身の……行末知れぬ習ひとは……誰が云ひ初めし言の葉か……知らねども……移れば變る世の中の……榮枯盛衰是非もなや

詞「此所は長門の壇の浦、何方も御存じの通り、玄海灘より押し寄せて

來る狂瀾怒濤は天を衝いて見るからに恐ろしい、海原の中を物ともせず船を進めて攻め來つたのは源氏の兵で御座います

フシ「中にも三浦義盛は……小船に楯を突き立て……此方を指して漕ぎ寄せぬ……平家の侍是を見て……差詰めく射倒せば元來り馴れし精

兵の鏃に廻る者もなし、斯て兩軍入り亂れ、或は攻めつ又た追はれ……海上忽ち修羅場……何時果つべきの見込みなし

詞「此の時平家の軍に従ふて居ました民部大輔成良は味方の形勢危きを見て取りしものか、忽ち變心して源氏の兵に味方をなし我が一族擧げて三百餘人船の舳を廻らして俄かに平家の軍勢を射立てましたから堪りません

平家方は今の今迄で我が味方よと安心して居たものであるから俄かに騒  
き出し陣形忽ち亂れ出したので此の有様を眺めて居られました平家の大  
將新中納言知盛は怒れる顔に朱を注ぎ愈々味方を罵りまして源氏の軍に突  
進して此に大海戦と爲りました

フシ一思ひも寄らぬ裏切りに源氏の兵は力を得……平家の船に……漕ぎ  
寄せて……忽ち船に……飛び移り……敵を斬ること數知らず……然れど平  
家も必死にて命限りに戦ご寄せ来る敵の多くして飛び来る矢先に堪り得  
ず……水手、かんどり櫓を捨て……楫を枕の討ち死に……船さへ今は儘  
ならで……早や負け色となりける……覺悟極めし知盛は……」

詞「知盛卿は最早是迄なりと覺悟を極めましたか心に掛るは『天皇様』の

御身の上、又た女院の君や二位の尼の御事……如何なされしかと案じな  
がら御船の中へ行つて見ますと、従へ奉れる多くの女房達は早や如何  
に成り行く事かと心を痛めて居りましたので、知盛卿の顔を見りより、  
右左りより袖を引て涙ながらに尋ねましたので

フシ「何んと答へも知盛は……態と作りし笑ひ顔……言葉徐かに云るや  
う、……兼て覺悟の事なれば……今は何をか申すべき……只珍らしき勇ま  
しき……東男を見給へど……手づから船の掃除して、見苦しきもの海に  
捨て、此所を拭へよ拂ひよや……取り散らかして敵共、笑はれぬやう氣を  
付けよ、……覺悟極めし武士の命惜まぬ顔を見て……此の未如何にならん  
かど……聲を限りに……泣き叫ぶ、有様の……哀れさは……阿鼻叫喚の

生き地獄……」

詞「此の時海上一面に、何にか知らぬが怪しい物が浮んで居りますので何んであるかと、能く見れば、這は怖るべき海豚の一群で其の數二三百もありましたさうですが撫を吹き立てながら泳いで居ますので、人々は不思議に思ひ、陰陽學の小博士、安倍晴延を呼んで是れは、如何なる事であるかと問ひました

すると晴延は易を披いて見て居ましたが扱て申しますには、此の海豚が味方の方へ尾を向けて頭を敵方に向けて居りますと源氏の軍は危ふ御座りますすが船底を通り抜けて此方へ進んで來るものであつたならば味方は憑みになりませぬ

そこで、つらく海豚の状を見ますと、情けなや味方の爲には不吉と思はれますから、今は御最後の外は御座りませぬ」と云ひながら心の中にフシ「主上を始め……女院様……二位の尼等を始めとし、大臣、女房の身を思ひ……瀧なす涙をハラ〜と膝に流して忍び泣き……見るより多くの女官達……堪へ堪へし、悲しさの涙の關は……洪れ來て……又もドツと泣き叫けぶ……深き歎きの壇の浦……乾かぬ袖は芭蕉葉の露とも見えて哀れなり

詞「最ふ彼是れの間……源氏の兵は隙間もなく押し寄せて、平家の軍を取り圍み、放つ弓矢は雨の降る如くに飛んで参りますので天子様を御守り申して居た二位尼は、今を限りと覺悟を極めまして其身

には練色の二衣に白の袴を着け、御年僅かに八歳に成り給ひる、天皇様  
を抱き奉りました我が帯にて確と、玉體を畏れ多くも我が身に結び進  
らせ、日本帝國の三種の神器と仰ぎ奉れる、其の寶劍を腰に差し、神  
璽を脇に挟みて徐かに、船首へ出て参りましたが此の時の心の中は如何  
で御座りませう

フシ「慈に安徳天皇は……八歳の御年にお在せども……萬の上に長け給  
ひ、王の……御顔の美しく、……御髪は黒く房やかに……御背に懸て給ひ  
ける……御形こそ類なし……今しも尼に抱かれて……御心如何に思召けん  
さもいぶかしき御氣色に……いづこへ行と仰せける……悲しけれども二位  
殿は……心に泣て堪へつゝ、

詞「誠に畏れ多い事で御座りまするが、源氏の兵共は弓矢を御船に進ら  
せまして、如何にも不敬の事で御座りまする故、此の船を後に致し、別  
の御船へ御幸をば仰ぎ奉る」と申しながら、尼殿が  
最期の歌に

今ぞしる御裳濯川の流れには

浪の下にも都ありとは

フシ「名残留めし其歌の……詞も未だ終らぬに……身を躍らしてザンブ  
リと恨も深き壇の浦……底の藻屑と成り給ふ……あはれ昨日の、昔まで一  
天四海の主上とし殿を祝ふて長生に……門を不老と名けしも今は雲井の…  
……龍下り忽ちにして海中の、鱗と變り給ふこそ悲しき事の極みなれ、つ

くく思ひ廻らせば、花に、噎へし十善の……御粧ひも……今は早や無常  
の風に匂ひ失せ赫き渡る萬乗の……玉體浪に影もなく、沈みて御座す痛は  
しき……

村上義光錦の旗風

フシ「緑も深き松原の……松の木の間……身を寄せて山路迥かに見上  
ぐれば、……高峯に續く白旗は……深山嵐に打ち靡き麓を守る兵士の、兜  
の星はきらめきて寄せ来る敵を防ぐなる其の光景の雄々しきに……築し城  
は遙々と、雲井に高く聳えたり、頃は、延元三年の……二月半の事なり  
き、未だ雪深き、みよし野の……吉野の山の奥深く籠り給へる大塔の宮を

攻めんと畏くも……押寄せ来る賊兵は……北條方に、さる者と聞えし出羽  
の入道が……卒る來れる數萬騎

詞「早や矢戦争が始まりましたが城の要害が頗る堅固であるので進み兼  
ましたので、敵は一計を案じ出し城の後ろなる金峯山へ廻つて、守りの  
無い搦手へ火を掛けながら攻め立てましたので、さしにも猛き、忠勇の  
士も前後の敵を防ぎかねて討死する者も多くありました

フシ「勝に乗じて賊兵は……猶も進みて大塔の宮の籠りて……おはしま  
す……藏王堂へと打ちかゝる宮も今はと思しめし、討ち出で給ふ有様は……

……上る朝日に輝ける赤地錦の直垂に……鎧の袖のさらりと、其の御姿  
の勇しき

詞「此の時忠勇共にならびなき勇士の数の二十人が死なば諸共と堅く決心の色を示しながら、宮様の前後左右に従ひまして、雲霞の如くに進み来る敵兵の真中に打ち入りて、彼方、是方と斬り立てましたから寄手の数は多くありまして、真心籠めた忠義の人々の刃には向ふことが出来ぬと見えまして、彼方此方の谷間へサツト引き上げました但其の間に宮様は逸早く、藏王堂へ御歸りになりましたが

フシ「今は……防がん術もなし……年頃よくも仕へしよ、いでや最後の酒宴せん……卒人々と大庭に……立せ給へる御姿を見れば……七筋の矢は立ちに……頬のあたりも傷つきて……流るゝ血沙おびたいし御心猛き宮なれば……流るゝ血をも傷手をも、更に……物ともしたまはず

……常に變らぬ……御氣色に大盃を三度まで……打ち傾けてまじませば木寺の相摸大太刀に……敵の首を刺し貫ぎて……宮の御前にかしこまり、

……聲勇ましく謠ひ出す

「才鋌劔戟を降らす事電光の如くなり。磐石岩を飛す事春の雨に相同じ然りと雖と天帝の身には近づかでの。修羅彼れが爲めに破らる。」  
はやしを擧げて謠ひつゝ、劔を左右に打ち振りて大和男兒の勇しく、舞ひたる様ぞ雄々しけれ

詞「宮様より下し賜はりし一盃の酒に、生死の境も打ち忘れまして皆々心を養ふて居る其の間に、大手の戦ひは段々烈しく成つて参りまして、敵と味方が入り交りたる関の聲は天地に轟いて物凄い計りでありました

此の時村上義輝は戰場より此方へ驅けて参りましたが左も口惜げに、城の彼方を睨みながら聲さい震はせて無念顔  
フシ「一二の城戸は……敵の爲め、討ち破られて今は早や……防がんやうもなく成りぬ、敵の大軍來ぬ隙に……物の大事にならぬ間に……何處にもあれ切り破り……宮には……早く落ち給へ……我れは御跡に留まりて、いとも畏き事なれど、召させ給へる御鎧……錦の直垂給はりて……御命に代りまつらん……いざ……」

詞「義輝は宮様の鎧を着て御名代に立ち潔よく戦死を遂げ度いと申し出ました宮様には御聞入れが御座りません、御言葉優しく仰せられるに

は  
あゝ義輝よく忠義に厚き汝の志、喜しくは思ふが死なば諸共、何處迄も一所にと……仰せの御言葉を聞て義輝は聲を荒らげ  
さて「言ひ甲斐のなき御詞で御座りまする、宮様には、大事な御身の上ではお在しませぬか、サア早く上帯を解かせ給へと急ぎ立てられまして宮様も、實にもと思し召して御手を帯に掛け給へ熟と義輝の顔を御覧になり御言葉優しく  
『やよ義輝よ……義輝よ、汝の恩は忘れぬぞ』と  
涙ながらに仰せられますと

フシ「忠義に厚き大和武士……武士の鑑みの義輝は……直と鎧を脱ぎ替

へて……二の大城戸に駆け上り宮の御姿幽かにも……遠く成り行く様を見  
て……時刻はよしと聲高く、名乗り上げつゝ大塔の宮の最後を……よやとて  
群がる敵を切りなびけ猛火の中に……飛び入りて清き最後を……逐げにけ  
る……されば忠義の……名は今も……あはれ千歳に傳はりて譽れも高き、  
吉野山……櫻の……花と競ふなり

太閤記賤ヶ岳合戦

(佐久間玄蕃の奮戦の場)

詞「賤ヶ岳は、近江八景に琵琶湖の北にある山で御座へました太閤秀吉  
公が、柴田勝家、佐久間玄蕃等と戦争をして勝利を得、目出度く天下を

握つた名高い古戦場で御座います

フシ「六十餘州に……豪傑の……名を轟かしたる……右大臣織田信長も  
あはれや……京の本能寺に於て、逆臣明智に……殺されて……」

詞「間もなく羽柴筑前守秀吉は、中國征伐より引き返して、攝津の尼ヶ  
崎に於て逆臣光秀を亡ぼし主君の仇を報じましたが、其間と言ふものは  
京から近江は勿論、畿内、中國に至るまで又た昔の様な、亂れたる戦國  
の世となるであらふか」と

人々は安き心もありませんでしたが、秀吉が瞬くひまに、不忠不義武士  
道に叛く所の光秀を誅して天下の人心を安めしめたのは實に大層な手柄  
で御座ります



「フシ花開かんと欲すれば……吹や嵐に……散されて……月圓からんと欲すれば……浮き雲に……包まれて行く世の譬へ……茲に越前……北の庄北陸一の……大將と世にも……名高い……鬼柴田……修理の進勝家は……

詞「秀吉の勢ひの日々に盛んに成り行くを惡みまして其頃、伊勢の國、長島の城主、瀧川一益と相談して、來年の春、北國名物の雪の解ける時節を待つて直ぐ様軍勢を起し、伊勢と越前から、秀吉を挟み討にしやうと約束を致しました

フシ「壁に……耳あり障子に目……兎角秘密は洩れ安く……此の事早くも……秀吉の……耳に這入るや……機敏なる羽柴筑前秀吉は……驚く色は更に無く、ニコ／＼笑ふて近臣に打ち向へ、凡て戦争と云ふものは……先

んすれば人を制すぞや……者共用意と……忽ちに……

詞「時は、天正の十年十一月、先づ江州の長濱を攻め取りまして茲に砦を築いて多くの兵糧や……武器を蓄へて、何時でも勝家の軍兵を防ぐの用意を整へまして、自分は、北國が雪の爲めに閉ぢ込められて思ふやうに軍勢を出す事の出来ぬ内に……伊勢の瀧川一益を攻めて呉れんとて、直様、一手の軍勢を、伊勢の國へ向はせました

サア大變だ、先を越されし柴田勝家は、羽柴秀吉が伊勢へ軍勢を差し向けた事を聞いて、直ぐ様我が甥に當る……佐久間玄蕃盛政に軍勢約二萬人を興へて、雪中山越をして、近江の國の柳瀬と云ふ所へ陣を取らしめましたが此の時は天正の十年も早や暮れて明れば十一年の二月梅の蕾も

未だ固い頃で御座りました

フシ「天下分け目の山崎も……天王山の一戦に目出度く勝利を得て後は  
早や賤ヶ嶽……茲に勝利を収めなば最早天下は……我が者と勇みに……  
勇む羽柴勢

詞「此の柳瀬と云ふ所は賤ヶ嶽の北にある村で御座りまして今日では此  
の柳瀬から隧道が出来て汽車で敦賀へ往來が出来ますが……昔は五里の  
峠を越なければなりませんので、殊に冬になると此の邊は五尺以上も雪  
が降りますから、到底も山越は出来ませぬが

柳瀬より南は江州で雪はありませんで、中の郷木の本、長濱と云ふ順で  
柳瀬から長濱の間が丁度五里で御座へます

フシ「柴田勝家が……北國軍の先鋒は……加賀國……金澤の城主……前  
田利家の長男利長にて……遙か進んで關ヶ原……此所一面に……燒き拂へ  
又た退いて木の本に陣を布く

詞「秀吉は此の報知を聞きましますと、ヨシと計りに蒲生氏郷外七人の大  
將を残して、瀧川勢の押へとなし自分は残りの兵を率ゐて前田の勢へ向  
へました敵容易ならぬものと思ひましたから先づ兵を分て十三隊とな  
し、琵琶湖の北へ砦を築いて之を守らせ自分は本陣を長濱に布へて兩軍  
は睨み合の姿と爲つて居りました

フシ「花も咲くなる三月に……北軍の大將……勝家は……國中の軍勢皆  
な引さつれて、さらば勝負と柳ヶ瀬へ……進んで来たれど秀吉は砦を……

守りて出ざりき

詞「双方對陣の内に三月も過ぎまして彌生の花も早や散り失せ、若葉の緑も涼しげに見ゆる夏景色となりましたので、秀吉は美濃國を従へる爲に大垣へと出陣致しました」

フシ「北國勢の大將で鬼と呼ばれし聚傑の……佐久間玄蕃の盛政は……折こそ、好けれ……秀吉が美濃へ行さける……不在の間に……諸々の岩を攻めんとて……勇み立てども勝家は容易に之を許さざる……」

詞「此の時、盛政の陣に客分として居りました、山路將監と云ふは當時世に聞えた勇猛無双な者でありましたが玄蕃盛政が、勇氣勃々として禁じ難き様子を見て其の耳に、さゝやいで云ひますには

山「コレく玄蕃殿、秀吉方の大將中川瀬兵衛の陣は、賤ヶ嶽の北の麓なる大岩山に在て尤とも遠く、従つて備も大に手薄に見えるから潜かに進んで中川の不意を襲ふたならば一戦に大勝利は屹度で御座るぞそれに總大將の秀吉は大垣に居るから、とても急に之を救ひに来ることは出来ないであらふ」と

フシ「説き付けられて盛政は……翌る日の朝早く……勝家の陣へ訪ね行きて是非に許しを請ふてける

詞「勝家は頭を傾けて……暫らく考へて居りましたが、何か思ひ當る事のありましたか、獨り心に合點て漸々之を許しました、其時勝家が云へますには

勝「云ふまでもないが勝て兜の緒を締めよと云ふ譬もあるから、勝た後には必らず其所に留まることなく直ぐに返るがよいぞや」  
と懇々誠しめましたが、之れは此の邊の地勢が後に湖水を控へて居るので若しも敵に道を塞がれるやうな事があつては、歸る事が出来んで袋の鼠同様に成つてしまふからであります

フシ「血氣盛んの盛政は、斯る論しも馬の耳……悦び勇んで従弟なる同じ、佐久間の勝政と……一萬餘人の……軍勢を率きつれて……其の夜の中に琵琶の湖を西に循ぐつて馳せて行く……此の時……羽柴秀長は……木の本の附近なる……田上山の山上に陣を取り……堀秀政は勝家の陣に程近き……寶山に陣取つて居たりしが其の夜の中に盛政が陣を引て去つたとは、

夢にも知らで居たりける

詞「夜は未だ明けませぬが、霞は山も水も一面に罩めて見渡す限り湖水の水面は、ほの／＼と白く薄霧の内に隠れて向ふ側の岸は少しも見えず汀は……青葉、若葉に埋められて、朝の色深く湖心にこめて、清爽の氣は身に浸んでいたく心地よげで御座りまする、聽て岸の水の浅い所を見ますると二騎の武者が手綱をゆるめて馬に水を飲まして居ましたが

フシ「二人の言葉は……上方で……嬌々と吹くでもなく……吹かぬでもない初夏の……風は面に……そよ／＼と……馬の櫻を弄び……漣白

く岸を噛む其の有様の彼方なる……大岩山の山上に……陣を取りたる中川の旗、指物が朝もやの中に見え隠れ……實に太平の世なりせば、正に一輻

山水の繪畫とも云ふべきか

詞「暫らくすると、鶴は残りなく消え失せて朝日は眩い程に照り輝いて

居りますので、大岩山の壘も、岩崎山の砦も明らかに見直すことが出来

るやうに成つて参りましたすると、陣太鼓の音が山に響いて、岩崎山の

軍も、大岩山の軍も共に徐々と動き出して参りました

フシ「旗や……指物扱は又た……吹き抜きなどの種々が……青葉の山に

……見え隠れ……鎧に……兜……鎗長刀の……光がさらりと……朝日に

……閃いて山を下るを望み見し、北國勢は忽ちに……敵や来ると云ふや否

な、陣中俄かに……静まりて……堅唾さ……呑んで待つて居る

詞「双方の軍勢は、次第々に近寄つて互に五反計りを隔て、陣を取りま

したが

實にや草木も、甲冑の花を咲かしたかと思ふ計り誠に目が醒るやうな景

色でありますが聽て血汐に草木を染る怖しい大戦争が来るかと思ひば、

身の毛も、よ立つ計りで御座ります

フシ「此の時……佐久間盛政は……織田信長が……其昔、長篠の……戦

ひに用ゐたる戦略に習ふて腹心の……家來を密と遣はして、空に……爲り

たる大岩の……中川清兵衛清秀の壘にそつと火を掛けぬ

詞「風は無くとも湖水の邊りどて、自然と起る山風に煽られて、火の勢

ひは次第に強くなつて、木竹がバチ／＼と爆ける、火の手が天に上つて

来る

サア中川の勢は驚いた、是はと計り浮足になると敵は勢ひに乗じて攻めかける此方は益々亂れて来る中川は必死と爲つて味方の兵士を勵ましたから此處を先途と戦ふて居りました

フシ『北國勢の寄手より躍り出たる武者一騎……萌黄威に身を固め……兜も付けず髪さいも……振り亂したる大男……七尺ばかりの櫓の木に……鐵の鉞をば打ちたりし、八角棒を打ち振りて、栗毛の駿馬を進めつ、群がる雑兵バラ／＼と薙ぎ倒し宛然ら鬼神の荒れたる如き有様は……是れぞ柴田の甥にして北國勢の其の中で鬼の佐久間と呼ばれたる、玄蕃頭盛政にてありたりき』

詞『中川勢は此の勢ひに益々怯れて最早逃げ足となりましたを中川は

負けぬ氣の大將であるから、自ら三間柄の大鎗を提さげて味方の兵士を叱りながら踏み留まりて戦ひましたが寄手は我れに二倍の大勢にて入り交り／＼攻め掛るので味方の兵は一人として傷を受けぬ者はなく孰れも決死の色が見えましたが、又た一方の高山方の兵は山路將監に蹴散らせられて一人も踏み留つて戦ふ者もなく散り／＼になつて、田上山の羽柴秀長の陣へと逃げ去りましたか山路は之を追ふともせず直ぐ様取返して是も中川の勢へ攻めかゝりましたから、中川勢は愈々支へる事が出来ず、四途路に爲つて混戦致して居ります

フシ『中川清兵衛是を見て……烈火の如くに怒り立ち齒切りなりつゝ戦

ふに……乃向ふ敵はバタ／＼と將基を倒す如くなり

詞 大將中川清兵衛は味方を勵ましたながら奮戦致しましたが衆寡敵せず  
遂に佐久間盛政の爲に討れて天晴れ名譽の戦死を遂げましたが  
此の時佐久間は勝に乗じて、柴田勝家の言葉を用へず猶も留まつて戦ふ  
て居ましたが其の中に、秀吉は大軍を率へて此方に押し寄せて來たので  
折角の勝利は忽ち敗軍となつて其身も此の柳瀬の露と消えて仕舞ひまし  
たが其の御話は何れ明晩に……辨じ述べます

阿部 豊後守

(隅田川乗り切りの場)

フシ「花は……櫻木人は武士……武士の譽を末遠く……隅田の川と諸共  
に……美名を後に……流しける……天晴れ勇士を語らん  
頃は彌生の……春も過ぎ卯の花くだし五月雨の……殊に烈しく降り續き、  
……早や一月になりたれど……晴れる氣色は……更になく何處の……川も  
水増さり……土手は破れて橋は落ち多くの家の流るゝを、聞く人、見る人  
……人毎に……安さ心は更になく……かき曇りたる大空を……唯恨めしと  
睨むのみ

詞 隅田川は逆巻く波がドシ／＼と押し寄せて、今戸、橋場の邊りは一  
面の海となりて遂に堤みが切れましてので家は見る／＼押し流され、親  
は子に離れ、子は泣きながら親を呼び、果は溺れて死する者數知れぬ程

で御座りました

フシ「時の將軍家光は……千代田の城の櫓より、此の有様を見てけるが

……餘りと云ひばあはれさに……いざ／＼然らばいざさらば、自から行い

て人々に……

力を添へて助けんと……駒を進めて淺草の……川邊を指して馳せ行きぬ、

……聽て……彼方に……駒を停め……川面廻か見渡せば……思ひに勝る、

……物凄さ……棟に柱よ橋の桁……矢よりも早く流れ来る……

其の怖ろしき……状況は……悲惨と云ふてよかるべき……、何と言葉もあ

らぬなり

將軍つく／＼打ち眺め……聲曇らして云ひけるは

詞「アイヤ我れは……天下を支配する將軍の身でありながら多くの人が

溺れて死するのを、如何で見て居る事が出来ようぞ  
誰れかある彼方の岸へ馳せて行き篤と模様を見て來るべし』

『早く／＼』

と下知を、なされましたが、川一面は渦巻立ちて怖ろしく、瀧かど見ゆ

る水勢に、槍や長刀を執つては一騎當千なる將軍麾下の人々も互ひに顔

を見合せて我れ行くべしと、

乗り出すものは誰れも御座りませんでした

フシ「公は……馬上に……立ち上り……ダット臣下を見下して云ひ甲斐

もなき者共よ、……よし川水は烈しども……よし川浪は……高しども……



源平二氏の戦ひに……烈しき宇治の流れをば……先を争ふて渡りける……  
佐々木……梶原知らざるか……又た山崎の合戦に……遙か近江の湖水を……  
……乘り渡したる左馬之介……明智の……勇を知らざるか……行く者更に  
有ざれば……我れは自から行くべし」と  
叫びし聲も終らぬに……既に駒をば入れんとす

詞「將軍は氣色を變へながら、アワヤ、川の中へ飛び込ふとなされまし  
たので、臣下の人は吃驚仰天……駒の手綱を控へて

臣「こは何事の御心で御座りますぞ、マア此の水勢を御覽遊ばせ、宇  
治の流れも琵琶の湖水も此の烈しい流れに及び申すべき  
もしも乗入れ給ふたならば、貴とき御身も水の泡何卒此の事ばかりは曲

て御止り給はるやうに」と

フシ「言葉盡して……諫むれど……將軍争でか……止むべきぞ……再び  
聲を勵まして、否々放せ者共よ……無事泰平な今の世に……武備を忘るゝ  
武士の……眠れる……眼を……覺させん

詞「放せ

「放さじ

「放すべし

フシ「君と臣との……其仲に、……互ひに争ふ最中に……迥か彼方の、  
水上に……逆巻く浪を物とせず

駒乗り入れし……武者一騎……黒き立髪わかぬまで……寄せる自浪……鞭

打ちて……沈むとすれば又た浮び……浮び……沈みつ様々に進む姿の……  
勇しき

詞「アレよくと人々が呼び立つる聲に

將軍は遙かに……之れを御覽遊ばして

フシ「彼の……黒駒は誰れなるぞ……乗りたる武者は何者ぞ……あな勇

ましと喜びの……詞の裡に又た一騎、波に色添ふ白駒を……徐かに進めて

前に立つ、黒駒武者に聲かけて……進み行きける雄しさに

臣下の人々打ち守り……あゝ勇ましき振舞よ……夫れに、つけても前に立

つ、彼の黒駒は……阿部豊後……後に……續きし白駒は……抑も誰れなる

か何人か

臣下の聲を……耳にして將軍馬を立直し、扱は彼の武者、忠秋か、おゝ頼  
母しき心掛け

詞「前に進んだ黒駒武者は、安部豊後守忠秋にて後に續いた、白駒武

者は、忠秋の老臣、平田彈衛で御座ります

忠秋は、將軍の勘氣を受けて居りましたが、死ぬる命は一ツ、同じ死ぬ

るならば、花々しく川の瀬踏をして、武士の眼を覺させて呉れんものと

飛び込んだのが、將軍の御意に叶つて、目出度く勘氣の解けましたのは

實に目出度い事で御座ります

フシ「將軍笑みを含みつゝ……豊後を近く座に招き、詞優しく宣給はく

能くぞ行たり阿部豊後……

見よや……戦ひ收まりて、諸國の武士は皆な共に……世の泰平に馴れく  
ど……華奢風流を……學べども武備の嗜み更になく……斯る場合に臨みて  
も……僅かの水を恐れては……大和御國の……武士と……如何でか……争  
で云はるべき……折から汝は……勇しく命を捨て行たるは……武事を忘れ  
ぬ心がけ、後の世迄の……鑑ぞと……直ちに賜ふ五萬石……』

荒木又右衛門

フシ「今を去ること三百餘年……時は……寛永の十一年十一月七日の事  
なりき、所は……伊賀の國……上野にて、仇討なせる助太刀に……僅か一  
人の……身を以て三十餘名の敵共を……一人残らず……討ち取りて……其

の身は微傷の一ツをも受けぬ勇士の……又右衛門……荒木又右衛門の一條り  
……』

詞「只今辨じ述べます、荒木又右衛門と云ふ人は、伊勢國山田の農夫の子で  
幼名を牛之助と呼びました、五歳の時に最早十二三位に見えて自然に力  
も強ふありますので

先祖が武士であつたから牛之助をも武士にしようといふお父様の量見で  
其頃大和國柳生の里に、陣屋を構えて居られた柳生重兵衛光嚴と申され  
る劍術の名人にお頼みをして十二歳の時にお弟子と致しました  
斯る名人が深切に教いて下さるので、牛之助の上達も早く十八歳の頃に  
は最早誰れにも負ける事なく弟子中の第一位と呼ばれる程に成りました

何時迄も牛之助では可笑いと云ふので師より名乗の一字を貰ひ荒木又右衛門義村と改めました

フシ『此の時、師匠の仰せには……汝も最早柳生流、十分覚えて居る故に……他には……負けを取らぬべし、其處で一ツの頼みあり、聞えて呉れるか……さて如何に』

詞師匠の御言葉を争でか叛き申しませう、又右衛門は謹んで両手を突

又『海山の御恩を受けました、私儀譬へ生命に係る御用にても決して辭退は致しませぬ』

サア……何なりとも仰付け下さるやうに

柳『ア、能く云ふて呉れた、大切な用事と云ふのは他でも無いが、只今江戸表に於て將軍様にお教え申して居る我が弟は、劍術に相應に出来るが惜しい事には、父上死亡の折り諸國を廻つて居て家に居ぬ爲めに

劍術には最も肝腎な柳生流の奥義を知らぬ、去とて我は遠く江戸へ行て其奥儀を教へる譯に行かぬが、幸ひ汝は十分な腕前……何卒、江戸へ行て其奥儀を弟に教えて貰ひたい

だが江戸に在る弟は決して他人と仕合をせぬ事になつて居るから、其處を何とか巧くやつて弟に逢つて呉れるやうに頼む』

そこで又右衛門も直ぐに承知の由を申すと、柳生先生も大にお喜びにな

り、澤山の旅費や種々なる仕度を下されました

フシ「又右衛門は……早速に……旅路の……用意を整へて大和國を出發し、途中は變りし事もなく、神風吹くや伊勢の國……聞も床しき桑名より七里の海上船に乗り尾張熱田へ着きてける

詞「船が着いて茶店で休んで居りました所が表で多勢の船頭が、一人の零落た、武士を取り圍みながら何やら八釜しく申して居るので何事かと思つて其所へ出て見ると其武士が船賃を拂ふ事が出來ないとして頻りに詫をして居ましたので

又右衛門は見す知らずの人ではあるが、武士は相ひ互とて氣の毒に思ひ船賃を出して助けてましたが之れが山住伊兵衛と云ふ人で其場から又右

衛門の弟子となりました

フシ「隣の宿に……休みつゝ、最前より此の様子をば眺め居たりし武士は……鳥取藩の重臣で、渡邊鞆負と呼びてける最も立派な人なりき

詞「此の人が又右衛門の仕方を感心して、自分の旅へ招き幸ひ自分も江戸へ行くのであるから一緒に行かうと云ふので此所に道連れとなり無事に江戸表に着き、親切に世話をされるので、其儘渡邊氏の宅へ泊つて居りました

其所で如何かして、將軍家の御師範役、柳生飛彈守様にお逢ひ致し度ひと思ひましたが其の頃、浪人が大名に逢ふと云ふ事は中々容易ならぬ事でありますから

種々苦心の末、不圖思ひ當つたのは  
江戸表では、柳生流の剣術の道場を開くことがなならないと云ふ規定のあ  
るを知りながら

態と麴町七丁目の家を借り、其處に柳生流指南の看板を懸けて、鞆負の  
子の數馬に劍道を教えて居りました

此の事が段々評判になつて遂に柳生飛彈守様の耳に入りましたから或る  
日、飛彈守様から

「一寸來るやうに」とお使者が參りました

フシ「呼び出し受ける……其の爲に……態と指南の看板を……下げて様  
子を伺ひし、望みある身の……又右衛門、扱はと計りに喜びて、直ぐと仕

度も……忽々に

詞「柳生様のお邸へ伺ひますと、家老の大道寺平馬と云ふ人が出て道場  
の事を調べようと致しなすので

又「否々私儀は、殿様にお目懸らなければ何事も申し上げることが出  
來ませぬと云ふて何うしても口を開きませんので平馬も致し方なく

此の事を飛彈守様に申し上げますと、柳生様は大に御立腹で……何んだ  
無禮者め

「然らば道場へ通して、次第に依らば生しては置ぬぞ」と  
近習の者に刀を御持せになりて、道場へ御出掛になりました

フシ「又右衛門は……殿のお顔を見ると直ぐ、兩手を突いて平伏し、申

し上げ度き事あれば、情願お傍の人達を……何處ぞへお遣り下されと……  
人拂をば願ひける

詞「人々が居なくなりし時、又右衛門は、懷中より重兵衛様から預かつて手紙を取り出して殿様にお渡し申すと、何事かと

手に取つて御覽なされた殿様は、驚かれましたが物をも云はず、傍に在た刀を抜くなり

今しも叩頭を爲て居た又右衛門目覚めて、眞つ二ツに成れどばかりに斬り下しました

危やと思ふ間に又右衛門はヒラリと身體を代して刀を押え

「殿様之れが、柳生流第一の奥義で白刃取りと云ふ術で御座ります」

と申し上げ

是れから續いて他の秘術も残らず傳授致しました、其所で飛彈守様は大層お喜びになり、兄様の御深切や、又右衛門の苦勞を深くお禮申され、種々御馳走して又右衛門をお返しになりました

フシ「無事に役目が……濟みければ、最早用なき道場と……直ぐ様、其所を……引き拂ひ、……又も渡邊の家へ世話になりけるが……間もなく殿

の周旋で、大和國は郡山の藩主、本多大内記政勝殿へ、五百石の知行にて劍術の指南役……」

其所で又右衛門は、渡邊鞠負の娘で、お民さんと云ふ頗ぶるの別嬪さんをお嫁に貰ひまして、愈々本多家の家臣となりました

然るに又右衛門が所用の爲め江戸表を後にして、國元へ出發した留守に  
 惜しや渡邊鞠負は  
 河井又五郎と云ふ悪武士の爲に、殺されましたので後に残りし一人息子  
 の渡邊數馬  
 年は未だ漸く十八歳で御座りますが、何うしても親の仇を討なければな  
 らぬと思ひ深く決心の上、殿様のお許可を得て、仇討のために愈々我が  
 家を出發することになりました  
 然るに討なる、河合又五郎は、中々の曲物で御座りますから、旗本の人  
 達に頼みまして、九州の武家へ趣き人知れぬ土地へ隠れる事になりました  
 たが

それにしては、道中で若し仇討の人に見付つては危ないと云ふので萬一  
 の用心に  
 劍術の能く出来る、竹内鬼玄丹、今井白翁軒、櫻井甚兵衛等と云ふ兎に  
 角劍術の名人三十五人の多勢に守られて、潜かに江戸表を出發致しまし  
 た  
 フシ「此方は……渡邊數馬、武助と呼べる一人の仲間共に連れ、東海道  
 の宿々を……無念の涙に泣き明し、力と思ふ姉婿の、又右衛門に助太刀を、  
 頼んものと大和なる郡山へと訪ねしが……尋ぬる人は、播磨なる姫路城下  
 に在りと聞き、又も旅路を辿々と姫路を指して急ぎける  
 詞「今迄何事も知らぬ又右衛門は、吃驚しましたが扱て惜むべきは河合



又五郎、殊には我が妻の父上、此の仇を討ずに置くべきかと直ぐ様承知をして、殿様へ事情を述べて御暇を願ひ、大阪へと出て参りました。此の時は先年伊勢の桑名で弟子となつた山住伊兵衛も連れて居りました。

名は聞いたが未だ顔も知らない河合又五郎殊には何處に居るか解らない仇の所在を探して討ち取らうとするのでありますから

其地か此所かと聞き合せなご致して、種々に苦心を致した末、仇の又五郎が多勢の部下を引き連れて、東海道を登り近々の中に伊賀國上野を通ると云ふ事が知れましたので

主従四人は、天の與へと雀躍して喜び勇み、直ぐ様道を急いで上野の城

下へ趣き、上野の藩主

藤堂大學頭様に、詳らかに事の譯を申し述べて敵討の御願を乞ひました所が、神妙なりとて早速お許になりましたので

一同は更に勇み立ち、夫れく仕度をして、敵の來るのを今や遅しとばかり待ち兼ねて居りました

其時、荒木又右衛門は、渡邊數馬と二人の家臣に向へまして

フシ「愈々親の仇を……討つ時は來りしぞ……數馬は必ず他の者に……

目を懸けてはならぬぞよ、河合又五郎一人を敵として之と勝負を……致すべし、伊兵衛と武助の兩人は

數馬の傍を離れずに……二人の勝負を邪問する者があるならば……夫れを

ば、防ぐやうにして、決して我から進み出て、仕合をしてはならぬぞよ  
 三十餘人の者共は、此れなる荒木又右衛門、一人で確かに引き受ける……  
 詞「其の順序を能く云ふて聞かせまして最早仕度はよいサア何時でも御  
 座れと待つて居りましたが、何と勇ましいでは御座りませんか  
 フシ「斯る所へ櫻井甚兵衛を真つ先にして、河合又五郎を中央に取り圍  
 み、大切に守るやうにして、ノコくど遣て参りましたが如何にも滑稽の  
 やうで御座りまする……それと見るより、又右衛門、飛鳥の如くに飛び出  
 でぬ

上野の仇討ち

詞「ヤア卑怯なるぞ河合又五郎め、親の仇なるぞ、イザく尋常に勝負  
 を致せツ  
 フシ「大喝一聲叫ぶや否や……馬に乗つ、先に立つ、櫻井の……右の脚  
 をば一刀にスバリと計り斬り落す、荒木の武勇に……一同は……」  
 詞「コレハ大變々々と今更ながら驚いて吃驚仰天をやらかしても最ふ  
 駄目で御座りますから  
 それと覺悟を極めて三十餘人の者共は一同にドット刀を抜き連れて斬て  
 蒐りました、何のその  
 荒木又右衛門は阿修羅王の荒れたる如く、此處に現はれ、彼處に現はれ  
 千變萬化の秘術を盡して片ツ端から斬り殺して居りましたが

フシ「敵の中でも……さる者は……鎖鎌の名人として、人に知られし山田新龍軒である……」

詞「是れには有繋の荒木又右衛門でも、尊んで居た位な巧手な人でありますから

又右衛門も大切に立ち合を致しましたが、親の仇を討ち取らうと云ふ一心の切つ尖は又た格別、常日頃の勝負よりも十倍も二十倍も激しく、殊に柳生流の秘術を盡して天晴れ美事に討ち取つて仕舞ました

フシ「數馬は、如何にせしかと見てあれば、當の本人……河合又五郎と唯だ二人、火花散らして必死となりて、今ぞ……、戦ひの真ツ最中である詞「此の時、早や一人も残らず討ち取つて了つた荒木又右衛門は、急い

で其の傍へ馳せ行きまして、大音に、叫びますやう

「ヤア、數馬よ……確乎ヤレよ、又向ふた奴輩三十五人の者共は此の荒木又右衛門が、一人も残らず討ち取つて了つたから

残るものは、當の敵の又五郎一人であるぞ、それツ其處で右を拂へよ……最ふ大丈夫であるぞ

フシ「聲かけられて……剛まされ……數馬の元氣は忽ちに又た一倍の勇氣加りて、切ツ先き激しく攻め入りぬ

詞「又五郎は頼みに思ふ味方の人達が、一人も残らず討たれて了つたと聞て、忽ち勇氣が挫けると共に

槍先が次第に亂れて來ましたから、得たりと數馬は踏み込んで、又五郎

の右足をば、廢止とばかり斬り付けましたから堪りません  
 撞と倒れると、すかさず疊みかけて斬り倒し遂々親の仇を討ち取り雀躍  
 して喜びましたのは、左もあるべき事でありませぬ

此の目出度ひ中で唯だ一人……氣の毒なのは、數馬の供をして居た武助  
 で御座ります、主人の數馬を目覚めて切り込んで来た、薙刀の名人、星  
 合團四郎を防いで戦ひましたが、憐れや、團四郎の爲に殺されてしまひ  
 ました

此の武助の仇は直ぐと荒木又右衛門が取りましたけれども、年來忠義な  
 臣一人を失くしたのは、惜い事であるとして二人は氣の毒に思つて厚く、  
 葬つてやりましたそこで目出度く仇討が済みますと、藤堂家に於きまし

ては

武勇勝れた荒木又右衛門に悉く惚れ込みまして、何うか家來に成て呉れ  
 よと、切りに頼んで参りましたが、先に本多家に仕えて居た身で御座り  
 ますから本多家からも、是非に戻つて参るやうにと申して來られました  
 ので致し方が御座りません、それが爲に、藤堂家と、本多家との間に大  
 層な掛け合ひが起りましたが

又右衛門、何方にも仕へる事を止めて、因幡國、鳥取の藩主、池田家へ  
 數馬を連れて歸りました、池田家の指南役となり、一生を、長壽に送り  
 ましたは何んぞ目出度い事では……御座りませんか……扱ても皆様お退  
 屈……」

乳姉妹君江の野心

浪 花 節

フシ「小人……罪なし……玉を抱へて罪ありと……古人の、譬にある如く……君江は……母の言葉にて……始めて知れる房江の身……華族の……姫と聞てより……虚榮の心は……むらくと……母と我との其の外は……天地も知らぬ此の秘密……」

詞「何にも房江に語る事は無い、夫れよりも我が身が其華族様の姫であると偽つて、母が房江に渡して呉れとて遺した、證據の品を持ち添へて侯爵家へ行たならば……何んなに立派に暮されるであらふ、嘸や嘸……綾や錦を身に着けて、腰元とか、仲働きに冊づかれ、姫様々々と呼ばれ

浪 花 節

る丈けでも嬉しいばかりでなく

邸の中を出入りする毎に馬車や自動車で、面白くおかしく世の中に何一ツの心配も苦勞もなくて

フシ「心の儘に……口を送り……時めく人にも……嫁かれん……問つ答へつ胸の裡巧む心の……淺猿しき……虚榮の夢に打ち迷ひ深く約せし高濱の……勇の……義理も打ち忘れ……母の遺命を反古にして謀る心の非義非道……互ひに……變るな變らじと堅く約せし其の時に心を籠て……高濱が……後の證據に贈りたる……光りまばゆき寶石の……指環も……爲に光りなく心の……玉も錆てけり

詞「現在自分が華族の姫でありながら、母の臨終の間に合ぬため華族の

權利を盗まれてしまいました房江さんは  
何事も知りませぬから、母に別れた後は、何處迄も君江さんを姉と尊い  
まして、姉さんくと大切に仕へて居りました

フシ「心盡しの眞心は……雪と墨との相違あり……斯て房江は……和歌  
山の……女學校をば卒業し……師匠の君に伴はれ……身は迥々と……札幌  
に……家庭教師を勤めける……折から来る玉章は……日頃戀しき我が姉の  
……筆の雁信でありければ……飛び立つ如に悦びて

詞「開く間も遅しと讀んで行きました所がサア大變な文句だ、今迄、姉  
さんと計り思つて居た君江さんは、世にも名高い侯爵様のお姫様……」  
房「ア、妾とした事か、そんな事とは少しも知らないで十有餘年の長い

月日の間……姉さんくと我儘、氣儘に彼れよ是れよと無理計り云ひし  
事の今更に耻かしや、而し姉さんとても今迄は其身の上の事も御存じな  
かつたろうだが此の御手紙を見ると

フシ「母が臨終の……其時に……始めて知るや身の素性……紀念の品を  
證據とし、東都に出て高輪の……侯爵家を訪ねれば、殿は……昔を偲びつ  
悦び給ふ數限り……今は邸に起き臥して、昔を夢に暮すぞや……それに  
付ても妹よ遠く離れて在らんより早く此地へ來給へよ……」

詞「今とても昔に變ることなく、姉よ妹と呼び交して一ツ邸の中で仲よ  
く、して居たいから何うか早く東京へ來るやうにと、書て御座りまする  
手紙の文面……」

フシ「見るく房江は……嬉しげに……あゝ姉様の……御親切……嬉し  
と計り慕ひける心の裡を憐れなる……現に……其の身は……侯爵の……真  
の姫に……ありながら……名も無きものに名を奪られ……心の黒き其者を  
……姉と呼ぶこそ是非なけれ……」

あゝ世の中は……斯までも……濁り果ける……ものなるか……如何に……  
榮耀を、望むとて……優しい、女性でありながら……心太くも……替玉の  
不義を巧むぞ面憎し

詞「芝は高輪の邸に住み給へる、松平侯爵殿は、君江を我が子と思ひ  
給ふて、嬉しさ可愛さ……近くに若君昭信殿の夫人にせばやと思ふて居  
られましたが、若殿の昭信殿は君江さんの事を悦びませんで、兎角疎ん

で居られましたが、夫れに引き代へ、君江さんは深く昭信に惚れ込んで  
胸の裡は燃ゆる思ひでありました所で

御本尊なる若殿が知らぬ顔なる素振に、其の冷かなる心を悲しんで居り  
ましたが何も知らぬ大殿様は、時折り君江の心をお慰めになりましては  
必ず夫婦にする故に、行く末長く……相愛して友白髪……家門の榮を計  
り呉れよと優しい御言葉は何んど有難い事で御座りませんか

フシ「天は非道を……憎むなり……君江を嫌ふ昭信は……更に房江を愛  
しつゝ……互ひに……心を……語りける……君江は夫れと知りてより……  
我が立身の邪魔なりと……忽ち謀る舌の先……猶ほ侯爵に逼りつゝ婚禮の  
日をば急ぎしが……心の邪智は中々に……」

詞「房江を此所へ置たならば、未は必らず我が身の爲にならぬであらふ  
それよりは今の中へ他へ別にした方が安心であるとして、今迄の親切がコ  
ロリと變つて遂々房江を他へ遣てしまひました  
フシ「されば房江は……悲しげに……心に怨む其の無情……慾と……戀  
との其の敵……あゝ怖しの君江嬢

同天の報ひ

フシ「浪は……靜かに……水清く……眺も……常州平磯の海邊に立る……  
……巖の上……君江は……其所に腰掛けて、近くに廻る結婚を……獨り、  
嬉んで居ましたが」

詞「折から其所へ遣て来たのは高濱勇で御座ります、勇は先年米國から  
歸つて来て、君江の行衛を尋ねましたが、君江は早くも先年の契約を反  
古にして松平家に在るとの事を聞き、非常に立腹して其れより以來は君  
江の行衛を尋ね其後を附けて一言の怨みを云ふて呉れんとて血眼に成て  
追かけながら、漸々平磯の海水浴に遊び居るとの事を聞き、さらばと計  
かり此所へ遣て参りました

フシ「其れと見付けし……高濱は……白眼が如く突立て……君江の……  
無情を責めけるが……慾に心を暗ら闇の……義理も涙も無き君江、知らぬ  
顔する面憎さ」

詞「そこで勇は種々に云ふて君江の心を確めて居ましたが密かに君江が



身の素性、華族の血筋でも何でも無いと云ふ事や房江の身の上を我が身に盗んで居ると云ふ事までを探りまして

高君江さん、其れでは人道に叛くと云ふもの何うか其の量見を捨て、

房江さんに詫び、快く父子の名乗を爲せ申した方がよいでしょう」と

フシ「深く君江の罪を責め……其の改心を促せ……君江は……遂に聴

かざりさ……

「懇々と諭しましても、君江は少しも聞き入れませんので、我慢に我

慢をして来た高濱勇も

嚇と怒りまして

フシ「今は何をか語るべき……戀の怨みと身の耻辱……勇は、名譽も打

ち、忘れ……己れ悪魔と、叶びさま、白刃は飛んで忽ちに……君江の胸に刺れたり……血沙はサツト寄る波を唐紅に……打ち染めて此處に……悪魔は亡びける、善に……善報……悪に……悪……天の報ぞ怖ろしき」長々の間、不辨舌なる口上にて辨じ述べましたる段、嚙々お退屈様……何れ話を代へまして、次席に御目にかゝります……」

石童丸高野登り

フシ「月には……村雲……花には嵐……兎角浮世は儘ならじ、……儘ならぬ世を捨舟の……加藤左衛門重氏は此世の中をつくくど、味氣無きぞと觀じつゝ……年久しくも九州に住み慣れたりし我が城を……昨日の夢と

打ち捨てて諸國修業に出で給ふ

詞殿の重氏公には、城中の人々に何の御言葉もなく、突然行衛不明と云ふ姿にて、當今ならば直ぐに警察へ、そうさく願を出して電報で尋ねますが、其の頃は何してどうして、出た切り雀御宿は何處だと言問が悪いと何年も尋ねなければなりません

そこで、お城の中に残つて居られました、奥方と若君の石重丸は、今日か明日かこ只管を殿様のお歸りを待つて居られました

春、夏秋も幾度か重なりまして、實に年月は流水の譬の如く此に早くも十年を過しましたが、風の便りに迥々父上は、紀伊の國高野山に居玉ふとの噂を聞いた石重丸は、

一日も早く父上様に遇い度い見度ひと思ふ心は矢も楯も堪りませんのでフシ「母上様と……二人連れ……菅の小笠を傾けて……旅の……勞れも厭なく辿り……て紀州路を……漸々高野の……禿宿

詞「紀州は高野山の麓にて、禿宿と云ふ所が御座りまするが、其處に、母子の二人は宿りを取り給ふて、

母「オ、其方も嘸や勞れただであらふ、而し逢ひ度い御父様に御目に掛る事が出来るから嬉しいのう

丸「ハイ、嬉ぶ御座ります、私は最ふ嬉ぶて……勞れも何も覺えませぬ母「ホンニマア……十年振りで御目にかゝる事が出来が……嘸やマア此のお山で御不自由をして居らつしやるであらふ、のう

フシ「明日は……逢はんと喜べど、此所に一つの……困難は……女人禁制の高野山……是非もあらねば母上を……麓に残し参らせて……石童丸は唯だ一人……心細くも山道を……踏み分けながら……優しくも峰の薬師や……瀧不動……手を合せつゝ伏し拜み

丸「何卒佛の御利益にて、一日も早く父上様に御目に掛る事の出来ませるやう……母上の御身にお障りの無いやうに」と

叮嚀に拜みまして、淋しい山の中を此所……彼處と歩きながら早や日も暮れましたので其晩は此の淋しい山の中に假寝を致しましたが、身に泌む寒む風は切らるゝ計りで御座ります

フシ「笠の屏風に……腕枕……諸行無常と告げ渡る……鐘の聲さい身に

泌みて……九百九十の……寺々や……峰……谷々の……阿彌陀佛、菩薩を念じて尋ねれど、父ぞと思ふ人なく

詞「三日二夜の間、彼方此方と、森々たる山中までも尋ねましたが、我が父上ぞと思ふ方には、何うしても逢ひません

それに又た、麓へ残して来て母上の事、如何して居玉ふか、嘸や嘸、父上様の御事や我が身の上の案じて居玉ふわと思ひば、彼方は父、此方は母、心は二ツ身は一つ

殊には年齒も行かぬ子供の身の上、何となら後ろに引るゝやうな心地がして、ゴークと松吹く風の音までも、麓に居ます母上が我が身を案じつゝ如何に、如何にと呼び玉ふ聲であるかと疑いれしす

丸「あゝ如何したならば宜からうぞ」

迥々と、遠く九州より此の深山の奥まで尋ねて来て、尋ねる父に逢ふ事  
どなく……此の儘、麓へ下つて母上に斯ぞと申し上げたならば、

あはれ、母上様の御心は、何んなであらふぞ、泣き給ふか、崩れ玉ふか  
其お心根を思ひば此の儘に歸る事か出来ない、ハテサテ、  
思案なく〜

フシ「歩むともなく……歩みつゝ無名の……橋を渡り来る……時しも左  
に……花を持ち……右には珠敷を……つまくりて……光明真言唱へつゝ、  
刈萱道心は坂を……下りて来りける

詞「此方は、坂を上る、彼方は坂を下る。」

丸「御免遊ばせ……」

フシ「見上げ……見下す顔と顔……石童丸の……振り袖と、彼方の……  
袖とがもつれつゝ……離れ難なく見えけるは……深き縁しの……あるなる  
か……」

詞「此の時、石童丸は、ツト進み寄りまして、刈萱道心の袖に絶りつき

丸「申し御坊様

坊「オ、可愛兒じや……何ぞ御用で御座るか

丸「ハイ少々御尋ね申しますが、此のお山に、今道心のお方がお在ます  
なならば何卒教ひて給はりますやう

フシ「何事なく、頼む……哀れさに……つくづく見れば……幼な兒が、

腰に差したる……脇差は見覚えのあるそれのみか

詞「鼻立ちの美しい所が何處となく母親に瓜二ツ

ハテサテと刈萱道心は心の裡に、不思議の思ひに堪へ兼ねましたが、じつと堪らへて申されますには

萱此のお山は、中々廣ふで、人も多く容易に知れぬ事もあるから、尋ぬる人があるならば、其人の名を書て、我が身の居所と其名を記し札場の所へ建て置たならば何時か逢ふ事もあるであらふぞ」と

何氣なく云はれましたが其の心の裡には、云ふに云はれぬ苦心の色が見えて居りました

石童丸は之れを聞きました、幾日過つても尋ぬる父上の様子も何も分ら

ぬので張し心の弓も自づと弛み、如何したならば宜からうやと、未だ幼き身の小さい心に、堪へ切れぬ心配の色を現はして途方に暮れる様子を刈萱道心はヂツと見て哀れと思ひ給へ

萱「コレ、若い人……最早日も暮れかゝつて来た故、尋ぬる人を探すも夜に入りては詮なき事、又た明日の便もあるであらふから、今宵は我等の坊へ来て宿るがよいぞや

フシ「言葉優しく手を把りて……自己が坊へと連れ歸り、國は……何れぞ……名は……何と、問はせ給へば石童丸は……せき来る涙押し止め

丸「ハイ私の國は九州筑紫の松浦潟、加藤左衛門重氏が、一子石童と申すもの、戀しい懐かしい我が父上が、丸が一ツ二ツの時に城を出給へて

今は何處にお在すやら、唯だ風の便りに此の高野の御山にお在と聞いた  
其の時の嬉しさ、母上共々喜び勇みまして、尋ねて来た其の甲斐もなさ  
りの重ねて早や四日

フシ「扱ては我が子でありけるか……口に言はねど其心……刈萱忽ち胸  
せまり……止めんとして……留かぬる、涙の……雨の露……年

詞「石童丸は、それを悟りましたか俱に涙を流して、ヒタと傍へ馳せ寄  
り刈萱の顔を見上げながら

九「モシ貴僧様は我が父上様では、お在ませぬか、何となく御懐かしい  
氣が致しますをが、もし父上様でお在したならば、何うぞ明かして給は  
れよ」と

前に寄り添へ、後へ廻りて刈萱の袖に縋り付き懇ろに請はれし時の刈萱  
は、身も心も切らるゝ計り

石童丸を其儘抱きよせて

「オ、我れは、御身の父であるぞ」と名乗らんと思ひましたが、又た  
名乗り兼ねて、落る涙を拭いながら、石童丸に向はれまして

刈「あ、聞けば、聞く程氣の毒な事であるが、御身の尋ねる其刈萱と云  
ふ人は惜や去年の秋に病氣に罹りて此の世を去つてしまはれたと、宣へ  
ば、今まで、もしやと計り心の裡に喜んで居た石童丸は此の一言に其身  
は崩るゝ計り

「ワツと泣き伏して、今は早や生きたる人とも見えませぬ

現在親である刈萱道心は、此の有様を見て、名乗て親子三人喜び度いのは山々であるが名乗てしまへば切角の修業も水の泡であるぞと、切なる心を我慢致しまして

フシ「泣いて崩る、石童は千々様々に……慰めて……應て墓場へ連れて行き……一ツの石碑を指さして

刈「ヲ、是れこそ御身が尋ぬる所の父上のお墓であるぞ」と

フシ「教へ給へば石童は……力なくく跪き、涙にぬれし……袖袂しほりも敢へず香を焚き……両手合せて……南無阿彌陀……」

詞「南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛」と  
聲も憐れに、伏し拜む、其の姿を見るに付けて刈萱は、餘りの悲しさに

胸も、はり裂けるばかりで御座りましたが

フシ「無情を……感じ世を捨て……國を……出てより十年餘、朝な夕な

の……修業にて……生者必滅……會者定離、本來空の理を……悟りながら

も……恩愛の……情には跪きものなるか

詞「墓場に撞と涙き崩れて、身も世もあらぬ迄に悲しみをる、石童丸を抱き起して

詞「コレ、其の悲しいのは最もであるが、而し涙は佛様の爲にならな

いから夫れよりも心を丈夫にして一先づお山を下り、母上に逢ふて此の事を語り、回向をしたならば佛の爲めにもなるであらふ」と

懇ろに諭されまして、石童丸は泣くく山を下りて参りましたが母上は

嘸や嘸お待ち兼ねであらふ、早くお目に懸つて詳しく御話をしよう

フシ「母に告げんと来て見れば……哀れなる哉、母上は……石童丸を、

……待ち兼ねて……麓の野邊に……枯れ残る……草葉の……露と消え給ふ、

……嗚呼如何なれば斯くまでに……世にも不幸の身なるぞや

九「西も東も分らぬ時に、生の父上には生き別れ、今又た遠き旅路を辿

々と尋ね来て、尋ねる父に逢ふ事の出来ぬのみか、力と頼む唯た一人の

母上に死に別れるとはあゝ何たる事であらふぞ

フシ「天にも地にも……唯だ一人……便りとするは姉ばかり……逢ふて

此の事語らんと、高野の山を後にして、又も旅する……海と山……再び築

紫に歸り来て……姉上……如何にと……尋ねれば……姉も此の世を後にし

て呼べど答ふる聲もなし

詞「父に別れ、母に別れ又た姉に別れて頼る方なき石童丸は、可哀相に

天を仰ぎ、地に伏してヨヨと計りに絞るも袖に血の涙

フシ「扱てもつれなき……浮世かな……應て其の目も暮れ果て……更け

行く夜半に……霜はさえ、磯山松は音もなく、千鳥しばなく築紫瀉……浪

に漂ふ捨小舟……引く人もなき石童丸は……」

詞「天にも地にも唯一人と成りて他に便りの無い石童丸は、涙ながらに

つくづく思ひますよう

何日や、高野山へ登つた時に、我が身の事を様々に世話しつ慰めつ心に

掛けて下されし、彼の御僧……御名は確か刈萱様と申されたが、彼の情



け深い御心、今より便りて此の身の上を御願ひ申さん」と  
フシ「心定めて又も又た故郷の空を……後に見て……再び登る高野山、  
便り便りて刈萱の……庵室尋ねて御弟子にと

詞「何事も世の中に望みの絶えた私しの身の上、責て佛の道に入り、父  
上、母上、姉上の御後を吊ふて瞑福を祈り度う御座へますから、何卒御  
坊様の御弟子にして給はるやうにと、涙ながらに頼れまして刈萱道心も  
是非なく石童丸を弟子と致しましたか、  
現在、親子でありながら、名乗る事も出来ぬ其の心の裡は如何に辛いで  
御座いませうぞ、思ひば世の中は實に塞翁の馬とやら儘にならぬもので  
御座います

浪 花 節 大 會 終

フシ「應て二人は……連れ立ちて紀州の……高野を……後に見て、諸々  
國々を修業なし廻りく……信濃なる世にも知られし善光寺、茲に父子  
は……足を留め、彌陀唱名に勉めつゝ刈萱は自己が命の終るまで、親であ  
るぞと……名乗らぬは……是ぞ修業の……一つかや……されば哀れは……  
後の世に遠く……近くに傳はりて、今も長野の……善光寺、親子地藏のあ  
りけるは……此れぞ……父子の、紀念なり……南無や大師の……地藏尊、  
……」



明治四十五年五月十九日印刷  
明治四十五年五月二十日發行

編輯者 綠葉散史

東京市淺草區南元町二十八番地

發行者 鈴木與八

東京市日本橋區若松町廿一番地

印刷者 井出五三九

不許複製

發行所

淺草區南元町二十八番地

盛陽堂

振替口座東京一四七〇六番

盛陽堂發行

現代書簡

正價三十錢  
郵稅六錢

義士壯舉錄

正價三十錢  
郵稅四錢

一休和尚

正價三十錢  
郵稅四錢

薩摩琵琶歌集

正價廿五錢  
郵稅四錢

宴會座敷藝

正價廿五錢  
郵稅四錢

東京振替口一座一四七〇番

浪花節大会

本  
文  
ラ  
ジ  
オ  
付

098263-000-6

特30-486

浪花節大会

なら麿 / 口演

M45

DBU-0126



特  
4